

## 六十年史への宿題

元専任編集室員 吉川卓治

『名古屋大学五十年史』は、この大学においてはじめて編まれた本格的な「正史」であり、これまで解かれてこなかった数多くの問題について明らかにしている。しかし、その一方で、未解決のまま残された課題も無数にある。一九九〇年四月、僕が名古屋大学史編集室に勤務するようになって、たしか最初に与えられた仕事は、その時企画されていた『写真集』に載せるため、名古屋大学の淵源である仮病院と仮医学校の建物の写真もしくは絵図を入手することだった。

ともかく右も左もわからぬままに、あちこちの図書館や資料館に足を運んだ。古い写真を所蔵している郷土史家の人たちにも尋ねまわった。仮病院が名古屋藩の「元評定所」に、仮医学校が「元町役所」にあったということは、『愛知県公立病院及医学校第一報告』の記述からわかっていた。しかし、仮医学校があったとされるのは「元」の町役所だったのに、それが本町筋に評定所と向かい合っ立って立っていたことを知らなかったため、勝手に「元町」の役所だと思い込んでしまった。おかげで、「モトマチ?」「はい」「ホンマチと読むんじゃない?」「いいえ、モトマチだと思えます」「本町でしょ?」「いいえ、元町です」「本町にあった町役所じゃないの?」「はあ…」という、わけのわからぬ会話のすえに、やっと自分の誤りに気づかされたりした。

多くの人たちからさまざまな手がかりや周辺資料をご提供いただいたものの、結局、写真や絵図は見つけられなかった。しかたなく写真集には、かわりにその位置を示す古い地図と『尾張名陽図絵』に描かれた本町筋の街の様

子を掲載することになった。

それから次に課せられた使命は、仮病院に最初に招聘された張三石という医師と、名古屋大学史上における御雇い外国人教師第一号となったヨングハンスの写真もしくは肖像画を探し出すことだった。前者については、島岡真氏の御示唆により鈴木要吾の『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』の内容から、松本順らとともにポンペから医学を学び、長崎医学所の助教を勤めていたことが明らかになったため、長崎まで足を延ばしたこともあった。ヨングハンスについては、名古屋を去った後アメリカで福沢諭吉の息子の世話をしていたとされるが、さすがに太平洋を渡るまでにはいたらず、滞米中の知り合いの先生に手紙でお願いするにとどまった。

張三石の肖像は夢にまで出てきたが、やはりこの二つの課題も果たすことができなかった。写真集には島岡氏が見つけられた張の著作の表紙と署名部分を載せることになり、ヨングハンスについても医学部に所蔵されている彼の著作と契約書でお茶を濁すことになった。

こうして振り返ってみると、僕はいったい何をしていたのだろうかと思ってしまう。自分が引き受けたはずの課題の多くは、元町役所や張やヨングハンスなどと同じように解決されなまま残ってしまった。「ないということがわかっただけでも一つの成果だよ」と慰めてくれる人もいたが、自分の非力さを思い知らされたのも確かであった。資料室の方々には、今後ここで述べたものをはじめとする残された多くの「宿題」に継続的に取り組んで、その成果を六十年史、七十年史の編纂に生かしていただければと切に願う次第である。

(神戸商科大学講師)